

本音の コラム



さとう じゅる
佐藤 優

三十日に投票が行われる沖縄県知事選挙について、あえて刺激的な言葉を用いて、今後の日本と沖縄の関係について考えてみたい。政府は、知事選挙を含む沖縄の選挙を植民地の選挙と見なし、辺野古新基地建設阻止が沖縄の有権者が民主的に選出する知事の公約であっても、政府の意思と反する場合には「外交・安全保障政策は政府の専管事項である」と主張して沖縄の民意を無視する。これに対して、政府の意向に適う候補者が当選した場合には、「これこそが沖縄の民意だ」と言って、辺野古新基地建設を強行する。これは植民地における

植民地の選挙

選挙に対する宗主国の対応に他ならない。知事選挙の結果がどうなることも、中央政府の意思を強行するというゲームのルールを定着させ、沖縄人に「ヤマトに抵抗しても無駄だ」と諦めさせることを、東京の政治エリート(国会議員、官僚)は狙っている。沖縄に対する構造化された差別が現れている。

このような状況を変化させるために翁長雄志沖縄県知事は、文字通り命を懸けて闘い、倒れた。

二〇一五年五月十七日、筆者は辺野古新基地建設に反対する沖縄県民大会で登壇した。翁長知事が琉球語で「ウチナーンチュ・ウシエーティナイピランドー」(沖縄人を軽く見てはいけません)と呼びかけていた姿が甦ってくる。(作家・元外務省主任分析官)